

新ひだか町の農業2024（令和6年）

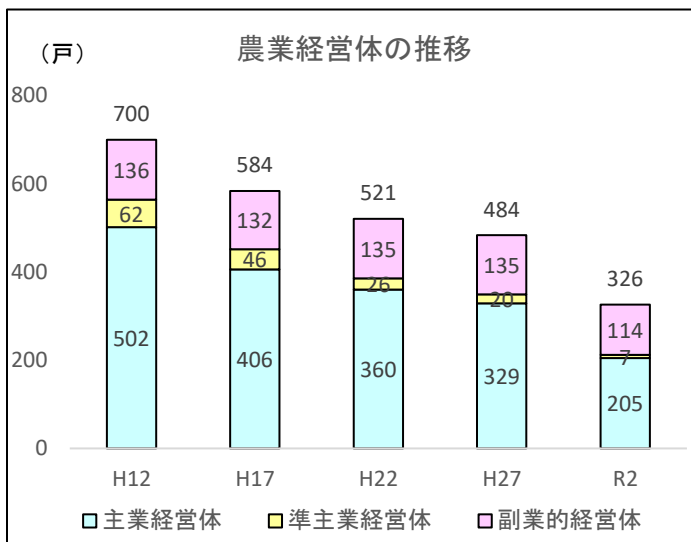
1 農家戸数等

農家戸数、農家人口は共に減少傾向にあり、平成12年の700戸の農業経営体は令和2年では326戸となり、20年前と比較し374戸が減少しています。特に71.7%を占めていた平成12年の主業経営体は、令和2年では62.9%とこの20年間で8.8ポイント減少しています。

農家人口は、平成12年の2,823人が令和2年には978人となり、20年前と比較し1,845人が減少し、34.6%の減少率となっています。

農業就業人口（自営農業を主として従事した世帯員数）は、平成12年の1,772人が令和2年には659人となり、1,113人が減少し、37.2%の減少率となっています。

また、そのうち65歳以上の割合が45.7%を占め、就業者の高齢化が進んでいることがいえます。



資料：農林業センサス ※令和2年から個人経営体

農家戸数及び農業就業人口等の推移

区分	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年	2年/12年
販売農家戸数(戸)	700	584	521	484	326	46.6%
農家人口(人)	2,823	2,243	1,837	1,557	978	34.6%
農業就業人口(人)	1,772	1,405	1,254	1,090	659	37.2%
うち65歳以上割合	36.5%	34.9%	38.7%	40.3%	45.7%	-

資料：農林業センサス ※令和2年から個人経営体の数値

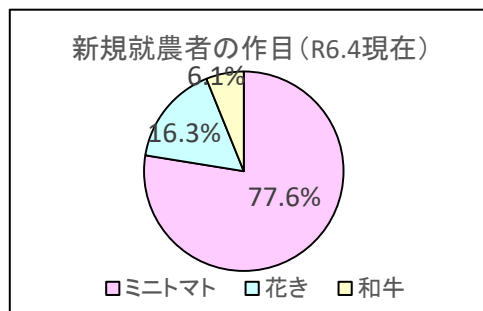
新規就農者の状況は、町の振興作目を「ミニトマト・花き・和牛」としていることから、この作目での就農者となっています。

本格的に新規就農者の受入体制を構築した平成25年から令和6年までの就農者は49名となり、そのうち新規参入者は44名、親元就農は5名となっています。作目別では、ミニトマト38名、花き8名、和牛3名となっており、77.6%がミニトマトの就農者となっています。

新規就農者数の推移 (人)

区分	H25	H26	H27	H28	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5	R6	計
新規参入	1	1	3	5	5	5	4	2	3	3	4	8	44
親元就農	0	0	0	0	2	3	0	0	0	0	0	0	5
計	1	1	3	5	7	8	4	2	3	3	4	8	49

資料：農政課調



資料：農政課調

2 耕地面積

令和2年の耕地面積は、9,160ha（田14.6%、畑85.4%）で、15年前の平成17年と比較して約1.6%の減少となっています。内訳としては、畑が100.8%と増加しているのに対し、田は86.5%で、田の減少が進行している状況にあります。

区分	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年	2年/17年
耕地面積	9,310	9,260	9,180	9,160	98.4%
田	1,550	1,540	1,460	1,340	86.5%
畑	7,760	7,720	7,720	7,820	100.8%

資料：耕地及び作付面積調査

3 経営規模

令和2年の1戸あたりの平均経営耕地面積は、約17haで、全道平均の約30haを大幅に下回っています。

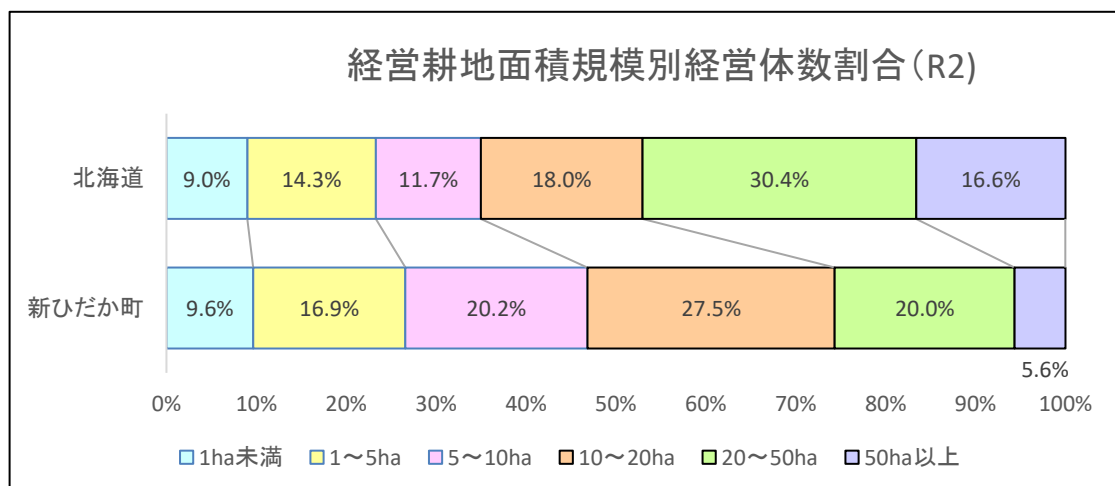
特に、10ha～20haの階層が117戸で最も多く、全戸数の27.5%を占めていますが、20ha以下の階層でみると316戸で74.3%と北海道の53.0%と比較すると中小規模経営の農家が多いことがいえます。

また、農家戸数が減少している一方で、1戸当たりの経営面積が増えており、離農等に伴う軽種馬農家や肉用牛農家への農地の集積が進んでいる状況にあります。

経営規模別農家戸数の割合（農業経営体総数） (戸)

	1ha未満	1～5ha	5～10ha	10～20ha	20～50ha	50ha以上	計
新ひだか町	41	72	86	117	85	24	425
北海道	3,141	4,992	4,080	6,280	10,626	5,794	34,913

資料：2020農林業センサス



資料：2020農林業センサス

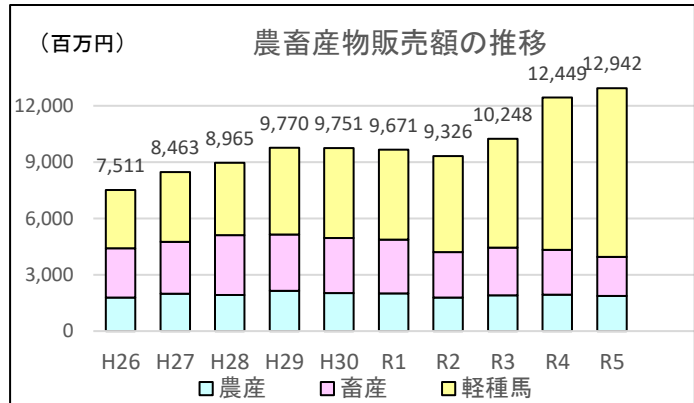
4 農業生産

農畜産物の販売額は、令和2年までは平成29年の9,770百万円をピークに減少傾向にありましたが、令和3年から増加に転向し令和5年では12,942百万円でこの10年間では最も高い販売額となり、その要因は軽種馬の販売額が大きく伸びたことが挙げられます。内訳としては、軽種馬がその69.5%を占め、次に肉用牛（肥育・育成）が11.4%、酪農が4%となっており、

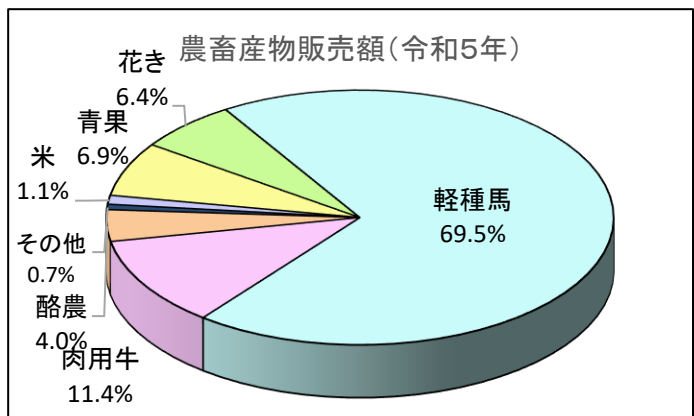
畜産が全体の84.9%を占めています。農産はミニトマトを主力とする青果と花きが主な農産物で13.3%を占めています。

令和5年の主な農畜産物の生産・販売状況は、新型コロナの第5類の移行によりこれまでの日常生活に戻る中ではありましたが、燃料・肥料・飼料等の高止まりや記録的な猛暑による高温多湿の影響で農業経営に大きな打撃が見られました。

そのような状況下においても軽種馬については、北海道市場の5開催合わせて売却総額が5年連続でレコードを更新したほか、売却頭数、売却率、平均価格とも過去最高の記録となりました。



資料:JA調(みついし・しずない)



資料:JA調(みついし・しずない)

主な農畜産物の生産・販売状況

区分	令和5年		令和4年		増減	
	生産量	販売額	生産量	販売額	生産量	販売額
	(俵・t・千本・kg・頭)	(千円)	(俵・t・千本・kg・頭)	(千円)	(俵・t・千本・kg・頭)	(千円)
米	10,098 俵	146,405	12,058 俵	144,330	△ 1,960 俵	2,075
ミニトマト	1,199 t	817,148	1,200 t	838,235	△ 1 t	△ 21,087
トマト	84,583 kg	24,101	107,208 kg	35,169	△ 22,625 kg	△ 11,068
胡瓜	35,260 kg	12,465	53,660 kg	16,244	△ 18,400 kg	△ 3,779
ほうれん草	46,408 kg	19,906	46,980 kg	24,996	△ 572 kg	△ 5,090
花き	6,349 千本	832,080	6,780 千本	859,391	△ 431 千本	△ 27,311
アスパラ	8,933 kg	12,730	12,074 kg	16,260	△ 3,141 kg	△ 3,530
農産計	-	1,864,835	-	1,934,625	-	△ 69,790
生乳	4,935 t	518,051	6,389 t	608,064	△ 1,454 t	△ 90,013
肉用牛(育成)	1,458 頭	866,541	1,564 頭	1,072,211	△ 106 頭	△ 205,670
肉用牛(肥育)	483 頭	608,762	490 頭	632,061	△ 7 頭	△ 23,299
畜産計	-	1,993,354	-	2,312,336	-	△ 318,982
農畜産合計	-	3,858,189	-	4,246,961	-	△ 388,772
軽種馬	738 頭	8,992,390	720 頭	8,123,280	18 頭	869,110
総合計	-	12,850,579	-	12,370,241	-	480,338

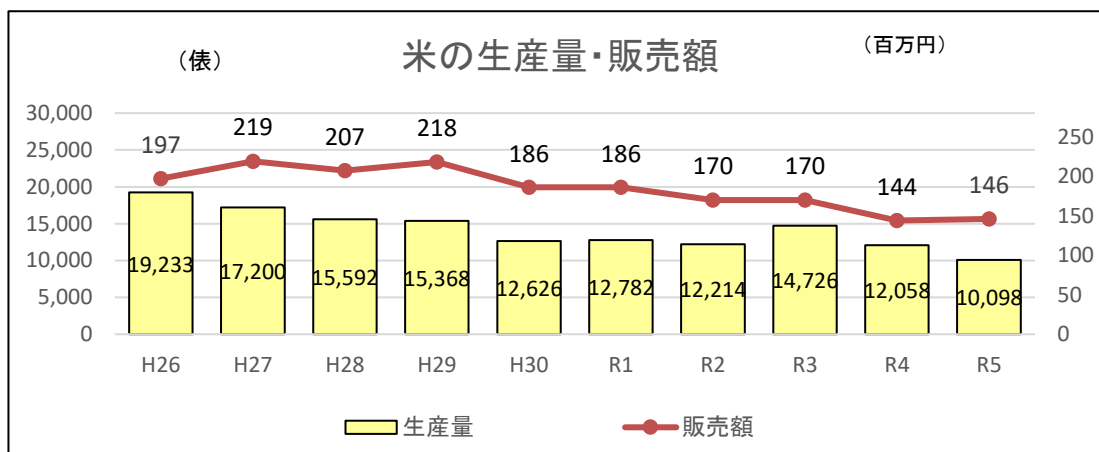
資料:JA調(みついし・しずない)

5 農畜産物の生産状況

(1) 水稲

水稲作付面積は年々減少し、令和5年の水田面積2,455haのうち、水稲作付面積は188haで転作率は92.3%となり、これに伴い生産量、販売額も減少傾向にあります。

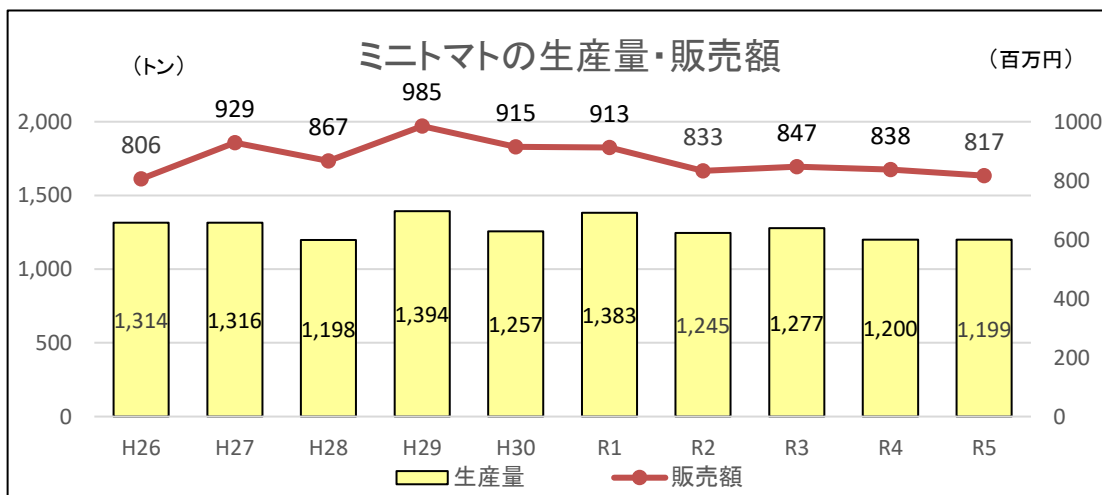
令和5年の作況指数は、北海道、日高管内がともに104の「やや良」となり、全国の101の「平年並み」を上回り、計画数量よりも多くの数量を出荷することができました。1等米比率は、97.8%と全道平均（87.2%）、全国平均（61.3%）を上回る水準で、登熟が良好で比較的品质の良い米を収穫することができました。また、米の相対取引価格は全国的な不作の影響などもあり昨年に続き価格上昇となり、販売額は昨年よりも2百万円増となりました。前年対比で、生産量は83.7%、販売額で101.4%となりました。



資料:JA調(みついし・しずない)

(2) ミニトマト

ミニトマトの栽培戸数、作付面積は、ここ数年は生産量、販売額共に横ばい傾向にあります。促成、半促成、抑制栽培の栽培体制を確立し、5月から11月までの安定した長期出荷体制で、キャロル10を統一品種とした「太陽の瞳」のブランド銘柄で道内外市場に出荷しています。単価も近年は600円/kg以上と高水準を維持しており、令和5年は前年よりも17円安の682円/kgとなりましたが、7月から9月の猛暑により着果不良や樹勢低下等による収量低下が影響し、生産量、販売額ともに前年よりも減少となりました。前年対比で生産量は99.9%、販売額は97.5%となりました。



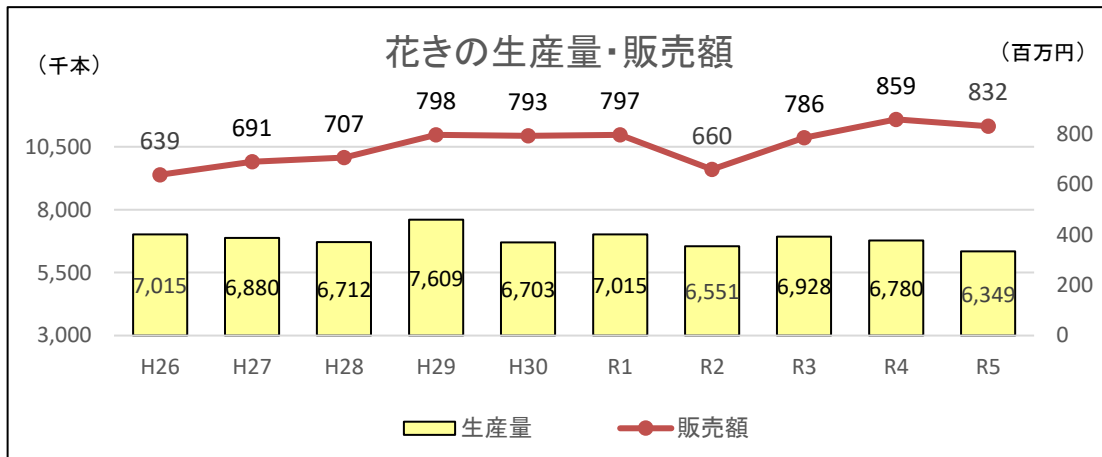
資料:JALずない調

(3) 花き

花きは、三石地区を中心に静内地区、浦河町の栽培農家による広域出荷体制で定時定量出荷を確立し、関東・関西を中心とする道内外に「みついし花だより」の統一ブランド銘柄で出荷しています。

生産する花きは、デルフィニウムをはじめ、スターチス、ダリアやマトリカリアなどの施設花が主体となっており、全販売額の72%はデルフィニウムが占め、全国一の販売額となっています。近年は、生産量は横ばい、販売額は増加傾向にあります。

令和5年は、猛暑により苗づくりや生育品質管理が厳しい状況にありましたが、全国的な品薄や輸入花の減少により相場も高値安定で推移し、単価も131円/本と前年対比で104%となりました。販売額は832百万円と2年連続8億円を突破しましたが、前年対比96.9%となりました。

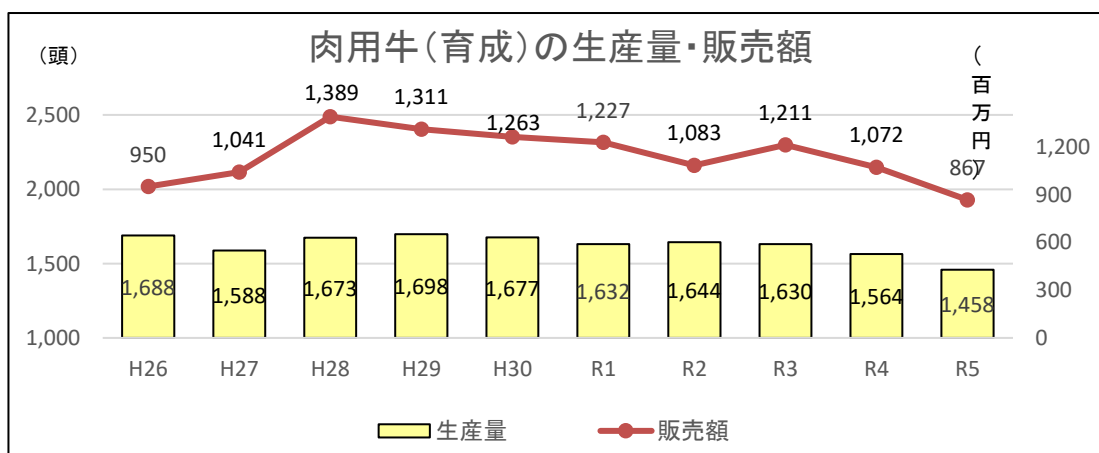


資料:JAみついし調

(4) 肉用牛 (育成)

近年の子牛市場での出荷頭数、販売金額は横ばいとなっていました。令和3年から大幅に減少しており、過去10年で最も減産、減収となりました。

令和5年は、新型コロナの第5類への移行があったものの、依然、配合飼料等の高止まりが続き、肥育生産者の買い控えによる枝肉相場の低調から子牛価格の下落や和牛生産にシフトする酪農家の急増による生産過剰などにより、子牛市場は厳しい状況となりました。また、出荷頭数の減少もあり販売額は前年対比で80.9%と大幅に減少しました。1頭当たりの販売単価も595千円と前年の685千円と比較し、前年対比約100千円減の86.8%となりました。

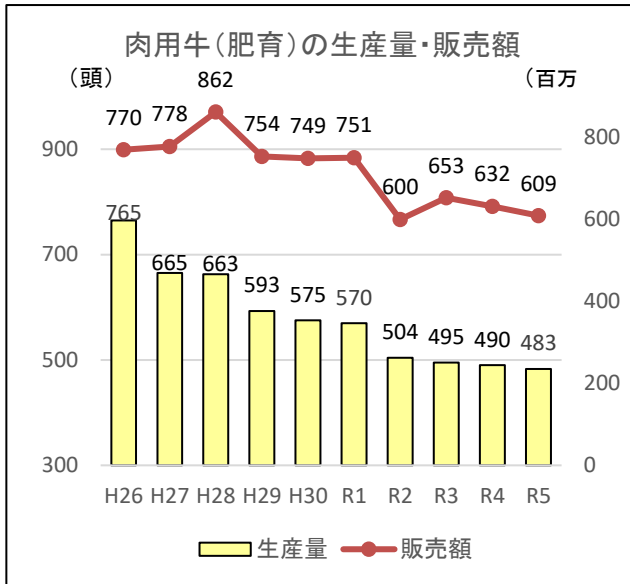


資料:JA調(みついし・しずない)

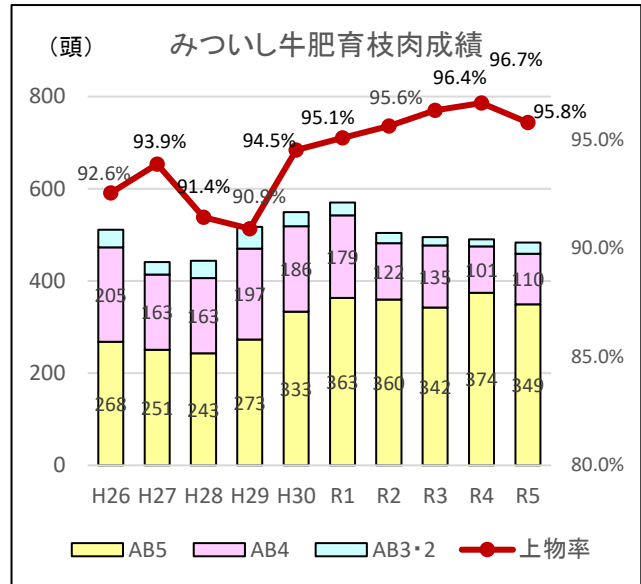
(5) 肉用牛（肥育）

肥育牛については、町内外農家による広域出荷体制を組み、一貫肥育による「みついし牛」として東京食肉市場へ出荷しています。枝肉成績の上物率は令和元年の95%超から4年連続で記録を更新し、令和4年には96.7%と過去最高を達成しましたが、販売額は、平成28年の862百万円をピークにその後は下降しています。

令和5年は依然、高止まりが続く配合飼料等の生産コストの増大や相場を支えていた輸出量の低迷などで枝肉相場も低調で推移し、非常に厳しい販売状況となりました。生産頭数は483頭で前年と同水準でありましたが、販売額は前年対比で96.4%、上物率は0.9ポイントの減の95.8%となりました。



資料: JAみついし調

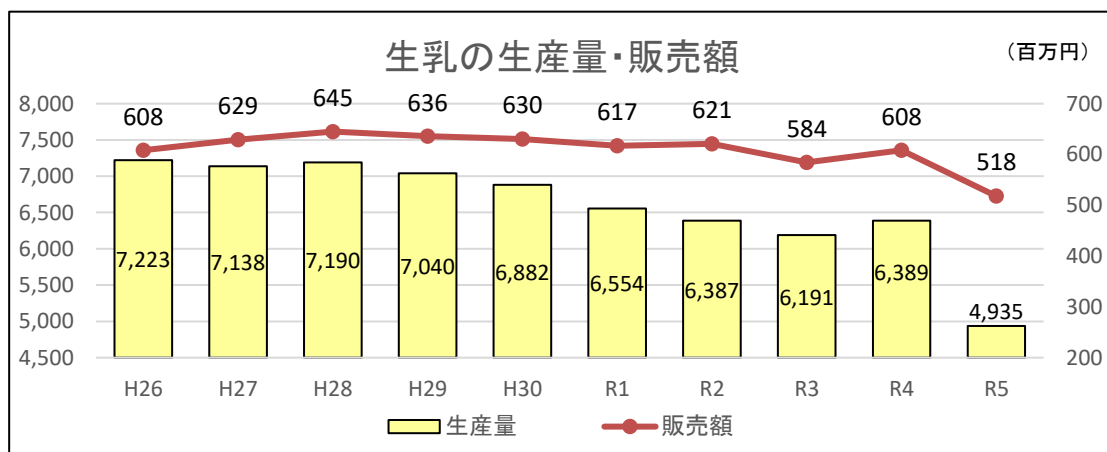


資料: JAみついし調

(6) 酪農

生産量は平成26年の7,223トンにピークに減少しており、令和4年は全国的な生乳の生産抑制をする事態である中、堅調な乳量の推移と乳価の上昇により生産量、販売額共に昨年を上回りました。令和5年は、生乳の生産過剰に陥り、生産抑制の仕組みが強化される事態となったことや離農などにより、生産量は4,935トンで前年対比77.2%、販売額は518百万円で前年対比85.2%となりました。

また、依然として配合飼料、電気代等の高止まりによる生産コスト高や初生子牛の安価などにより、非常に厳しい酪農経営が続いています。



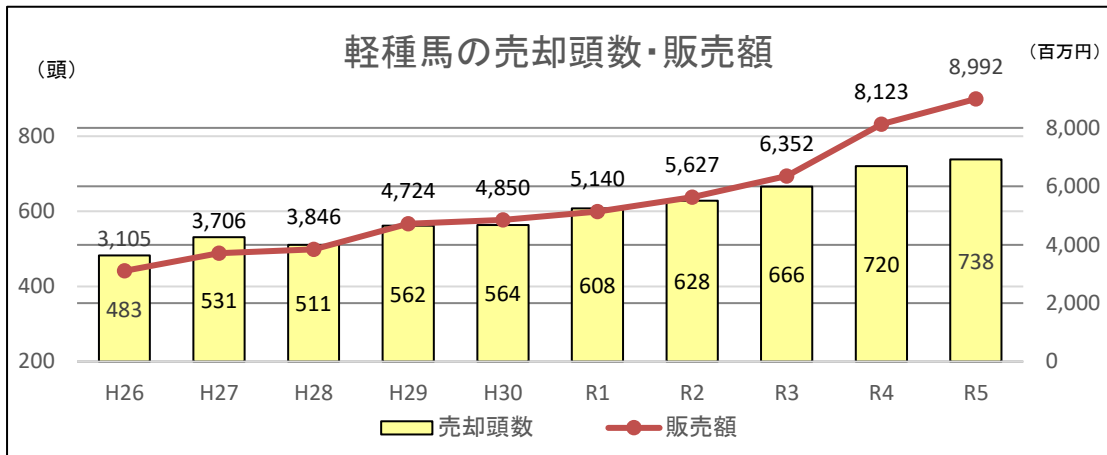
資料: JA調(みついし・しずない)

(7) 軽種馬

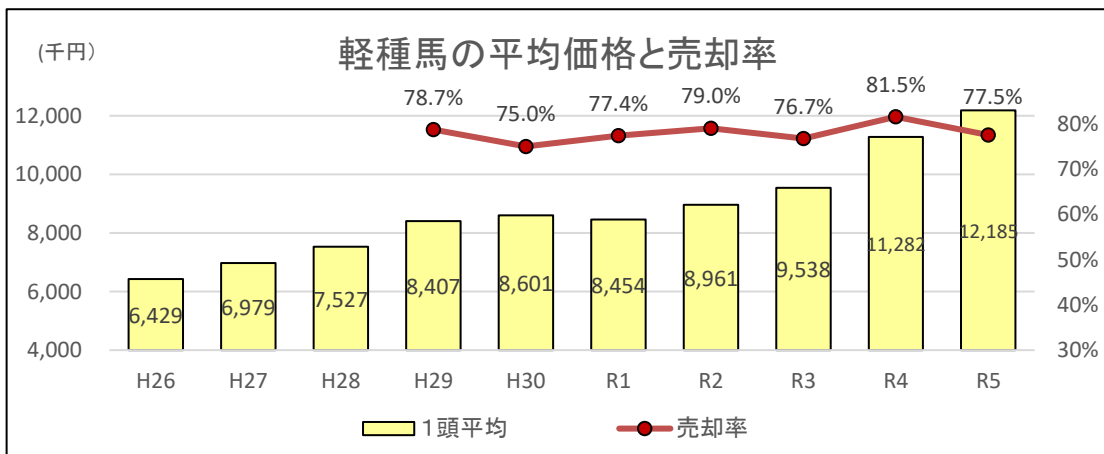
軽種馬においては、北海道市場が昨年引き続き活況となり、市場全体ではの売却総額は187億円で5年連続でレコード記録を更新しました。当町においても売却額が前年を大きく上回り、販売頭数は前年対比103%の738頭、販売額は前年対比111%の8,992百万円となり、過去の過去最高販売額を更新しました。

また、売却率は77.5%と前年より4ポイントの減となりましたが、1頭当たりの販売平均価格は上昇基調にあり、令和5年では前年対比で108%の12,185千円と、2年連続の1,000万円超となりました。

さらに、中央競馬、地方競馬の馬券発売も好調で、中でもホッカイドウ競馬にあつては、発売額が512億円で4年連続で500億円を突破する結果となりました。



資料:JA調(みついし・しずない)



資料:JA調(みついし・しずない)